

実施責任者 竹内綱史（龍谷大学）

近年、ニーチェ研究は英語圏を中心に飛躍的に進展しており、ニーチェの道徳批判の背景やロジックや意義について、精緻な研究が積み重ねられつつある。それをうけて、本ワークショップでは特に、難解で知られる「正義」をめぐるニーチェの思想について検討したい。

「ニーチェと正義」と言えば、「カリクレスの徒」としてのニーチェというイメージが広く知られている。プラトンの『ゴルギアス』に登場するカリクレスが、弱者によって立てられたノモスの正義ではなく弱肉強食のピュシスの正義こそ本当の正義だと主張したのと同様、ニーチェは「力への意志」に基づいて、現在支配的な奴隷道徳を廃して貴族道徳への「価値転換」をなすべきだと主張した、というわけである。そのようなニーチェ理解が完全に間違いだとは言いきれないとしても、ニーチェが「正義」に関して書き残したものははるかに複雑かつ豊かであり、今なお再検討するに値するものである。

すでにハイデガーやドゥルーズがニーチェの「正義」概念に注目していたが、その後のニーチェ研究は必ずしも「正義」を中心概念として扱ってきたわけではない。だが、「より純粋な正義へ」という「近代人の最高の要求」に応えるべきだと論じた前期から、最大多数のパーспекティブの統合として「正義」を語る後期に至るまで、倫理学や政治哲学のみならず認識論や美学や宗教哲学の問題にも関わる一つの中心的な概念としてニーチェは「正義」を論じていた。その思考は、社会正義の問題に限られがちな現代正義論に対しても、新たな視点を提供してくれるはずである。

本ワークショップでは、①ニーチェの専門研究上の意義、②思想史上の意義、③現代的意義、の三点を念頭におきつつ、「ニーチェと正義」という問題系の広がり、ニーチェの道徳批判そのものの射程を検討する。以下の三つの報告の後、フロアも交えて様々な点から議論を深めたい。

谷山弘太（日本学術振興会・杏林大学）「ニーチェにおけるルサンチマンと正義」： 後期の著作『道徳の系譜学』第二論文におけるニーチェの正義論について検討する。第二論文にてニーチェは、正義の基礎をルサンチマン（復讐心）に求めるE. デューリングの正義論を批判し、むしろそうしたルサンチマンに対抗することこそが正義の本質なのだと主張する。この点に注目することで、ルサンチマンと正義に関するニーチェ独自の問題意識を明らかにしたい。

大山真樹（中央大学）「自由な社会のための哲学とニーチェの正義」： ニーチェは、『ツァラトゥストラ』執筆期において、人間は平等になるべきではない、とする特異な正義と、人間は平等であるべき、とするルサンチマンから発生した正義概念とを対比する。そこで、ルサンチマンから発生した正義概念にやはり真理があることを詳らかにしつつ、近代にとって自明とされがちな平等を旨とする正義概念を活かすため、ニーチェの正義概念の持つ意味を検討したい。

大久保歩（大阪大学）「現代正義論とニーチェ」： ジョン・ロールズ『正義論』以来、正義は重要なテーマとして復権し、激しく議論が戦わされてきた。現在では、ロールズの「分配の正義」に対して、異なる観点からさまざまな正義の問題が提起されている。特に倫理学においては近年、「認識的正義」が議論されている。そこで、ニーチェのなかにも「認識的正義」に関する議論が存在することを明確にした上で、ニーチェが語る「正義」の現代的意義を検討する。

*本ワークショップは龍谷大学国際社会文化研究所の研究助成を受けたものである。